

【連載：一録音エンジニアの回顧録～アナログからデジタルへ～ 第7回】
オランダ、ドイツ、デンマークのパイプオルガンに魅せられて
 日本オーディオ協会諮問委員 穴澤 健明

VII-1. はじめに

今から40年以上前に、ドイツのシュトゥットガルトで、ヘルムート・リリングの演奏によるパイプオルガンの世界最初のデジタル録音が始まった。

筆者は1960年代の終わりに日立製作所との4チャンネル録音とデジタル録音の評価実験の進行役を務め、東京江古田の武蔵野音楽大学ベートーヴェンホールでのパイプオルガンの録音を担当する機会を得た。本連載でも何回か触れたが、録音のデジタル化の当初の目的は、混変調歪を改善することにあった。弦楽四重奏等の弦楽合奏と並んでパイプオルガンも混変調歪による音の濁りを最も嫌う楽器であることから、1960年代末のデジタル録音機の開発着手時点から弦楽合奏とオルガンは、デジタル録音の当初より達成すべき目標と定めていた。

その目標は5年後の1974年の12月に、シュトゥットガルトの丘の中腹に建つシュトゥットガルト・ゲデヒトニッシェ（＝記念を意味する）教会のカントル（音楽監督、教会楽師長）であったヘルムート・リリングによるドイツのオルガン製造会社ヴァルカー社製オルガンの演奏によって達成された。当時のリリングは意欲的な若手カントルとしてその名をよく知られ、ライプツィヒの聖トーマス教会のカントルであったバッハにも似て、教会での一切の音楽的行事を司り、オーケストラから合唱団、オルガンをも彼の統率下に置き、バッハのカンタータ全集の録音等にも取り組んでいた。

このシュトゥットガルトでの録音は、巻末の参考CD1と参考CD2 Track No. 3、4に示す「教会暦によるオルガン・コラール集」であり、内容はルター正統派教会の祝祭日の順序に従って、各聖日にちなんだ讃美歌をバッハが編曲したオルガン小曲集であった。戦後の物資のない時代にいち早く建設された会堂と電氣的にプランジャーで空気の出を制御する弾きやすい既製のパイプオルガンであったため、より美しい会堂の響き、歴史的なオルガンの美しい音色と言った点では多少の不満があったが、リリングの演奏は、正にプロテスタント教会の精神を伝えるにふさわしい敬虔な演奏であった。この録音は前号の回顧録でも取り上げたオルガン録音で最も豊かな経験を持つデンマーク人ピーター・ヴィルモースが担当した。

シュトゥットガルトでの録音直後に、歴史的なオルガン録音プロジェクトの立ち上げに関する相談をヴィルモースと行なった。その結果、スタッフがパイプオルガンに関する知識と経験を蓄え、交渉力を磨き、適切なオルガニストを選定し依頼することができれば、比較的安価にプロジェクトが実現できることが判った。早速録音したい会堂とオルガンをリストアップし、同時にバッハのオルガン全曲録音を完了したフランスの名オルガニストでパリ音楽院教授のマリークレール・アランにお弟子さんの紹介を依頼し、今やオランダの重鎮となっている若き日のジャック・オートメルセンを紹介してもらった。CDの発売が近づく1970年代後半には、筆者担当のヨーロッパ録音活動が盛んになり、多忙なオーケストラ他の大物録音の合間のひまな時間をヨーロッパ各地でのオルガン録音に充てた。

本稿では、まずパイプオルガンの基礎的な事柄について解説を加え、その上でパイプオルガンの魅力を探りその発展の中心的な役割を担った北ヨーロッパのオルガンと会堂について記す。

VII-2. パイプオルガン、その実際の姿とその魅力

1) パイプオルガンの録音を聴く時は、音量を大きくしないで聴くとその魅力がよくわかる。

パイプオルガンと言うとオーディオ機器と同様に 16 ヘルツや 32 ヘルツの超低音を大音量で出して、びりびり異音を発生させて悦に入っておられる方を見かける。オーディオセットではヴォリュームを回せば音量が大きくなるが、パイプオルガンでは風量を増せば音量は大きくなる。

もともと音量の小さかったパイプオルガンであるが、大きいことは良いことだと信じていたロマン派の時代になると、蒸気機関が発明され、パイプオルガンの送風機も人力から蒸気機関に代わり、巨大な音量を出すことが流行した。送風機の風量を上げると錫製のパイプがビリツキ、歪が生じ、迫力はあるが聴くに堪えない音が出る。ロマン派の楽曲ではまだ許せるとしても、バロック時代の澄んだ和声を聴かせようとする作品は、聴くに堪えないひどい音になる。これは今で言うと大音量でモニターした品性に欠ける抑揚のない録音や、所謂ハイレゾと言ってただただ帯域を広げて混変調歪ばかりの音を制作し迫力があると言って悦に入っているのにも似ている。

フランスとドイツとの国境に近いアルザス地方出身の思想家であって、医者であって、自身をアフリカでの医療活動に投じノーベル賞を受賞したアルバート・シュヴァイツァーは、高名なオルガニストでもあった。東照宮や秩父神社の木彫を作った左甚五郎の時代に活躍したオルガンの左甚五郎とも言えるオルガン製作者ジルバーマンはこの地域で活躍し、歴史的なオルガンを残した。

幼いころからそのジルバーマンの魅力あるオルガンの音色に接していたことも影響してか、アルバート・シュヴァイツァーは、20 世紀の初めに新オルガン運動と呼ばれるオルガンの改革運動を起こした。ロマン派の時代にただただ音量を大きくし歪の増えたパイプオルガンを再度評価しあるべき姿に戻そうとしたのである。この動きはその後も続き、パイプのビリツキの少ない比較的音量の小さいオルガンが一般化してきているのは喜ばしい。

2) 歴史的なオルガンは、会堂内のどこにどう置かれているのか。

多くの北ヨーロッパのオルガンは、通常会堂の祭壇と反対側のバルコニーの上に置かれており、会堂の参席者席に座ると正面から礼拝を司式する牧師や祭司の説教が聴こえ、頭の後方上部からオルガンの音が降ってくるという関係にある。

通常一つのパイプオルガンは複数のヴェルクと呼ばれるパイプ群からなり、左右前後上下に各パイプ群が配置され、それぞれに名称がつけられている。多くの歴史的なオルガンを前から見ると図 1 A に示すようにヴェルクが配置されている。同じオルガンを上から見ると図 1 B のように配置されている。その中で最も中心的な役割を担うのが中央のハウプトヴェルクである。この他にペダルと呼ばれる低音部を担うパイプ群が通常ハウプトヴェルクの両側に置かれる。ハウプトヴェルクの奥にはブルーストヴェルクが、そしてハウプトヴェルクの手前には、通常ソロパートを担うリュックポジティブが置かれている。このハウプトヴェルクの手前に鍵盤があり、リュックポジティブとの間に演奏者が祭壇に背を向けた席に座る。この演奏者席の前の鍵盤横には通常バックミラーが置かれ祭壇で何が行われているか観察することができる。中にはハウプトヴェルクの上にオーバーヴェルクが置かれているオルガンもある。

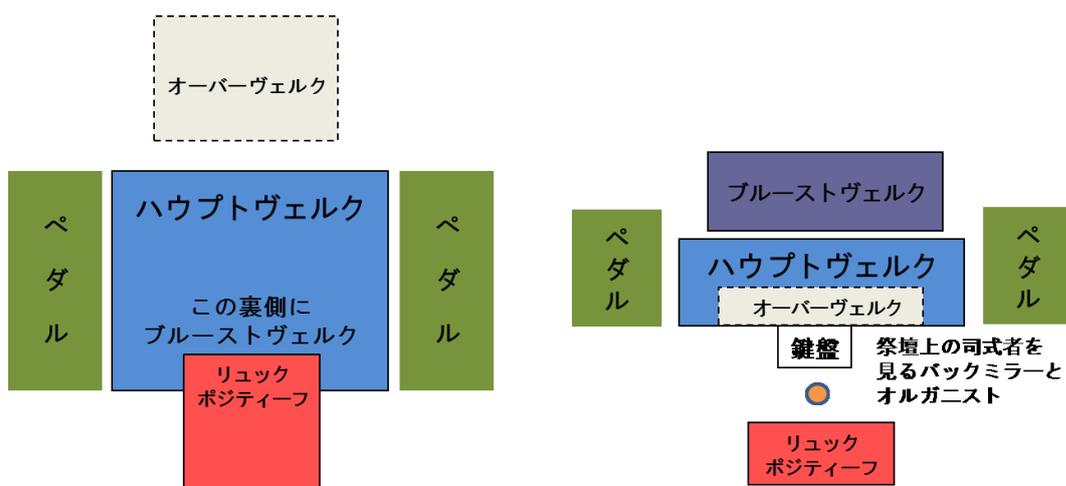


図1A 歴史的オルガンを前から見た例

図1B そのオルガンを上から見る

3) オルガンは普通会堂内のどこで聴くのか、録音ではどこの音を再現しようとするのか

録音に際しては、このギリシャ神殿やギリシャの芸術作品に見られるような左右前後上下で均整のとれた音響空間を捉えることが必要になる。このためマイクロフォンは、通常このハウプトヴェルクのパイプの歌口の正面軸上で各パイプ群のバランスが取れる距離に置けば良いということになるがその設置は容易ではない。10mの高さのスタンドを使って重いマイクロフォンを支えるか、20m以上の高さのある天井を見つめ、要石を探しその中央の孔にひもにロープを通しマイクロフォンを上から吊り下げるしかない。響きの良い会堂内のこの位置に置いたマイクロフォンから得られた良いオルガンの音は、この世の物とは思えないほど美しく、床上の席では聴けない音なのである。録音やCDでその音が聴けるのはなんと幸せなことだろう。

4) 歴史的なオルガンでの一般的な定位表現と音場表現

歴史的なオルガンの各パイプ群の中で各パイプは、一般に低音を出すパイプを外側に高音を出すパイプを内側に左右に散らして配置し、和音を出せばほぼ均等に両側のパイプが鳴るようになっている。このため低音では左右の幅が大きく広がり、高音では中央にまとまるという定位表現がなされる。米国や日本の一部のオルガンで感じられるピンポン玉のように音像が左右に動くことはない。この均整の取れたギリシャ的な空間表現は、オルガンがルネサンス時代後期に発展したと無縁ではなからう。この伝統はハイドン、モーツァルト、ベートーヴェン等の古典派の作曲家の時代まで続き、作品自体で均整が取れているばかりでなく、例えば第1バイオリンを左に置き、第2バイオリンを右に置く古典派の楽曲に対する一般的なオーケストラの楽器配置にまで、オルガンで行われたパイプ配置が影響を与えた。その後のロマン派の曲では左に第1バイオリンも第2バイオリンも置き、右にチェロを置き、左高音、右低音が一般化していることを考え合わせると興味深い。この左右の均整の取れた歴史的なオルガンの定位は、図1に示すヴェルクと呼ばれる各パイプ群間の音場表現につながり、左右の幅の表現は、ヴェルク間での幅の表現に拡大し、その上に奥行表現が加わる。

リュックポジティブの音は、中央でまとまりを持ちハウプトヴェルクの前に出てこなければならぬ。またオーバerveルクが存在するオルガンでは上下方向の音場表現もこれに加わる。

5) 歴史的なオルガンとは何か、オルガンの過去の工匠達と歴史的なオルガンの再現に挑む人達

歴史的なオルガンの定義があるわけではないが、何か一般のオルガンとの違いがないとそう呼べないので、その違いを考察してみる。筆者は、会堂が良い音響特性を維持出来ていて、写真写りに関係するので少なくともオルガンのケースだけでもオリジナル又はその復元で、オルガン自体は優秀なオルガン製作者によって製作されたものを歴史的なオルガンと呼んでいる。その会堂とオルガンの備えるべき条件と実情について、以下に検討を加える。

5.1) 会堂について

「会堂の響きが良く、歴史的に由緒があり、作曲家が弾いたオルガンと会堂であれば歴史的なオルガンと呼べるであろう」と思いたいのだがそう単純ではない。ひどい音がする場合もあるからである。由緒ある会堂であっても特にドイツではその多くが第2次大戦中の爆撃で破壊され、早く再建された会堂の中には資金不足により再現の程度が未熟な会堂も存在する。爆撃を免れた会堂でも、別の問題が生じることがあった。牧師とオルガニストの仲が悪く、牧師が実権を握り、説教がしにくいという理由で、筆者の同業者である音響の専門家に音響特性の改良（筆者にとっては改悪でしかないが）を依頼し使い物にならなくなってしまった会堂も多くみられた。

5.2) オルガンについて

オルガンのパイプは主に錫でできているが使用頻度が高いと耐久性に欠けるため、時々パイプを入れ替える必要がある。結果としてオリジナルのオルガンであってもオリジナルの音響特性を維持しているとは限らない。昔できた時に良い音がしていたが、手入れが悪く今はひどい音がするというオルガンも多い。

歴史的なオルガンの特色として筆者は、まず鍵盤で行う各パイプへの空気の制御を、木製の細い棒やスライダーで行なうメカニカル制御パイプオルガンであることを挙げている。この場合鍵盤が重くなり指で大オルガンと格闘をしなければならない。鍵盤はすぐにすり減ってしまう。その代わりに鍵盤の押し方により楽音の立ち上がりや立下りを制御できるので、才能豊かで指の強いオルガニストであれば微妙なニュアンスが表現できる。今では交換したかもしれないが、火あぶりになった宗教改革の創始者の一人ボヘミアのフスが司教をしていた有名なプラハのティン教会のオルガンの木製の各鍵盤の中央部は、30年前10mm程へこんでいた。

日本でも多く見られる鍵盤が電気的なスイッチで、パイプへの空気の流入を電気的なプランジャーで制御するオルガン、MIDIを使って電子的に制御するオルガンは、微妙なニュアンスには欠けるものの離れたところからコントロールできるという利点があるので便利である。

図1に示した伝統的なパイプの配置がなされ、4)項で記した定位表現、音場表現が可能であることも、プロテスタントのオルガン音楽では重要である。

5.3) オルガン製作者について

日本で名工左甚五郎が、日光東照宮、秩父神社などの木彫の名作を残したところに、ドイツ、オランダでは、ジルバーマンとシュニットガーという2人のオルガン製作者が現れ、多くの歴史的なオルガンを残した。

オルガンは、高価な材料を使うと音が良くなるという楽器ではなく、均整の取れたバランスこそ命と

される楽器である。このため基本構想や全体設計が極めて重要とされる。

ジルバーマンは、ルターが聖書のドイツ語訳に取り組み宗教改革を起こしたドイツ南東部のザクセン・テューリンゲン地方を中心にドイツとフランスの国境地帯であるアルザスロレーヌ地方にかけての地域で活躍した名工である。そのオルガンは、均整の取れた美しい外観を持ち、その外観を凌駕する輝きのある美しい音色が魅力的である。

一方のシュニットガーはドイツ西北部からオランダにかけての地域で活躍したオルガン製作者である。天井高が 20m 以上もある多くのこの地域の巨大な会堂のために、規模の大きなオルガンを製作した。その音色は重厚であり、構成のしっかりした曲でその特色を発揮する。

20 世紀になって登場し、多くの名オルガンの復元を行ったオルガン製作者もいる。デンマーク人のアネルセンはその代表であり、彼は一度オルガン製作を請け負うと一時納品は行うが、納品を完了したことはなく、納品後もオルガンの改良を亡くなるまで続けた。

6) オルガン録音で苦労する調律と外部騒音の除去

音楽の専門家で、調律の良いオルガンを聴いたことが無いから、オルガンは好きではないという方がおられる。調律の困難さを表す言葉である。数千本の温度特性の極めて悪い錫他のパイプを持つオルガンの調律は容易ではない。調律方法はパイプの種類によって異なるが、通常パイプの長さを実質的に変えることによって行う。大きなオルガンともなると親方と弟子の 2 人で半日以上かかってやっと調律が完了する。この調律を室内温度が安定しないうちに開始すると調律が半永久的に続き完了しないという悲惨なことになる。録音技術者は温度計を持ち温度が安定するまでひたすら待ち続け、その上で調律師に調律開始の指示を出すことが重要である。

この調律に加え苦労するのが外部騒音の回避である。歴史的名オルガンの多くは街の中心部にあるため、近くに市場や幹線道路や鉄道が存在し、外部騒音が録音の障害になる。警察が動いてくれて教会の会堂の周囲を交通規制してくれたこともあったが、通常は公共交通機関が運行を停止する深夜から早朝にかけての数時間に録音が行われた。また雨漏りのある屋根を持つ会堂で、20 数メートル上の屋根上の水たまりから落ちるしずくが石の床を打ち、その音が会場内に響き渡り、大きな屋根の上の雨水がなくなるまで半日以上録音の開始を延ばしたこともあった。

以上のオルガンとその録音に関する基礎知識を前提に、オランダ、ドイツ、デンマークのあまり知られていない筆者お気に入りの歴史的名オルガンを訪ねてみよう。

VII-3. 北ヨーロッパの歴史的名オルガンを訪ねて

オルガンとその音楽は、北ヨーロッパで発展を遂げた。

そこでは以下の 4 つのキーワードが生きていた。

- ・「バルト海沿岸の商業同盟であるハンザ同盟によるドイツの繁栄」
- ・「東インド貿易によるオランダ、デンマーク他の繁栄」「ドイツでのルターの宗教改革とその後のドイツ、オランダ、デンマーク他でのルター正統派教会の発展」
- ・「ヨーロッパの南北戦争ともいえる 30 年戦争によるドイツ東部の疲弊」

以下に取り上げるオランダ、ドイツ、デンマークのオルガンも、程度の差こそあれこの 4 つのキーワードと深い関係を持っていた。

1) オランダの歴史的なオルガン例

オルガンと音楽を重要視したルターが宗教改革を行ったが、そのルターに影響を与えたのがオランダ出身のエラスムスであった。そのオランダは16世紀から17世紀にかけてオランダ東インド会社を手掛かりに香料貿易で莫大な富を得、米国や日本にも羽ばたいた。この時代にオルガンも栄え、オランダの別名はネーデルランドであるがオルガンの好きなオランダ人は、良いオルガンが国のいたるところにあることから自らの国をオルゲランドと誇らしく呼んでいる。この言葉通りアムステルダムにも、チーズの市が立つアルクマールにも、商業都市ロッテルダムにも多くの素晴らしい歴史的なオルガンが存在する。

その中心ともなったアムステルダム古教会は、東京駅の手本になったアムステルダム中央駅正面の運河の奥に建ち、今でも観光客でにぎわっている。この古教会には規模は小さいが魅力ある音色を持つ歴史的なオルガン設置されている、その昔この教会のオルガニストであったヤン・ピーエテルスゾーン・スヴェーリンクは、南部のヨーロッパに出向き、ドイツでは後のバッハにつながる音楽家達を多数育てた。

このアムステルダム北方には湖沼地帯があり、その中の昔オランダの東インド貿易で栄えた古都カンペンを取り上げてみよう。カンペンには巨大な聖ニコラス教会が建ち、その会堂の中にはシュニットガーの流れをくむ巨大なパイプオルガンが設置されている。街は廃墟と化した商店や遊郭がそのまま残り往時の繁栄がしのばれた。このカンペンの情景とオルガンの外観を写真1と写真2に示す。このオルガンのパイプ群の配置は図1そのままである。

ここでのジャック・オートメルセンの演奏によるこのオルガンの録音を聴きたいところであるが、昔のLPはあるものの現在CDが発売されていないようなので、本稿では巻末記載の参考CDから割愛させていただく。筆者はこのCDの市販を切に望んでいる。



写真1. 湖の対岸の街ツヴォレから見たカンペン



写真2. カンペンの聖ニコラス教会内のオルガン

2) ドイツの歴史的なオルガンの例

ドイツはルター正統派教会とオルガンの中心地であったが、第2次世界大戦時の空襲でその多くを焼失した。ドレスデン近郊の昔からの小さな要塞都市フライベルグは、焼失を免れた貴重な街で

あり、その聖堂の中には初期のジルバーマンを代表する傑作オルガンが設置され、その輝きのある魅力に満ちた音色を聴きに米国他からの観光客が多数訪れる。このオルガンの外観を写真3と写真4に示す。このオルガンを図1と比較するとリュックポジティブがハウプトヴェルク前面に埋め込まれている点が異なり、オーバーヴェルクは図1のとおり存在する。

このオルガンを録音したCDは、巻末の参考CD2のTrack No. 1、5、7を参照されたい。



写真3. フライベルグのジルバーマンオルガン 写真4. バルコニーから見たジルバーマンオルガン

3) デンマークの歴史的な名オルガン例

コペンハーゲンの街中には、片手を超える貴重な歴史的な名オルガンが散在する。地方にもシェークスピアのハムレットの舞台となったクロンブルグ城近くの街ヘルシゴール（英名エルシノア）等に多数の優れた歴史的な名オルガンが存在する。コペンハーゲンの中心部にあるデンマーク海軍のホルメンズ教会にはデンマークのオルガン製造会社マルキュッセン&サンズ社の製作したオルガンがあり、参考CD2 Track No. 6、8でその美しい締まった音を聴くことができる。

本稿ではコペンハーゲンの北にあるソーレー修道院教会のオルガンを取り上げる。このオルガンの外ケースは、ルネッサンス期の物だそうだが、今世紀になってこの古いケースの中にデンマークのオルガン製作者アネルセンがデンマークのオルガン製造会社マルキュッセン&サンズ社の協力を得て製作した新しいオルガンが存在する。この会堂の響きは素晴らしく、5.5秒の残響時間がありながらどこまでも澄んだ音色を持ち濁りがない。

この会堂とオルガンの外観を写真5と写真6に示す。写真5の会堂前の湖畔には、作家ハンス・クリスチャン・アンデルセンが執筆した小屋がある。写真6では10mの高さを持つ照明用スタンドに設置された独シヨップス社製超小型マイクロフォンを見ることができる。

このオルガンの澄んだ音は、巻末記載の参考CD2 Track No. 2、9で聴くことができる。



写真 5. ソーレー修道院教会の外観



写真 6. アネルセン+マルキュッセン
& サンズオルガン

このオルガンを図 1 の構成図と比較するとオーバーヴェルクのみが無いことに気が付く。

VII-4. おわりに

本稿では、オルガンの外観の見方、その聴き方、オルガンの録音での表現、録音で苦労する点などについてまず解説を加えさせていただいた。その上で、筆者お気に入りのシュニットガーの流れを汲むオランダカンペンの巨大オルガン、ドイツフライベルグのジルバーマン初期の傑作オルガン、デンマークソーレーの 20 世紀の名オルガン製作者アネルセンの再現したオルガンを取り上げた。

本稿が皆様のオルガン理解の一助にでもなれば幸いである。

次号からは、筆者が加わった美空ひばりの最初のデジタル録音、スメタナ弦楽四重奏団によるベートーヴェン弦楽四重奏曲の全曲録音、ニューヨークでのジャズのデジタル録音、フランクフルト・アルテオパーでのインバル指揮マーラー交響曲全集の録音、ドレスデンゼンパーオペラ爆撃の 40 年後に行われた復興記念公演の世界中継放送、ここ数年行っている残響分離制御ユニットによる定位と音場の改善プロジェクトなどについて順次触れてゆくこととする。

参考 CD1： DENON COCO-70451 「教会暦によるオルガン・コラール集」

参考 CD2： DENON COCO-70639 「トッカータとフーガ～バッハ：オルガン名曲集」

Track No. 3、4： ヘルムート・リリング演奏シュトゥットガルトのヴァルカーオルガン

Track No. 1、5、7： ハンス・オットー演奏フライベルグのジルバーマンオルガン

Track No. 6、8： イエルゲン・ハンセン演奏コペンハーゲンのマルキュッセンオルガン

Track No. 2、9： クヌート・ヴァッド演奏ソーレーのアネルセン&マルキュッセンオルガン